

ずいひつ

Z U I H I T U



次期基本計画の策定に向けて

仙台市水道事業管理者
板橋 秀樹

はじめに、大阪北部地震、平成30年7月豪雨、大型台風による被害、そして北海道胆振東部地震等、全国各地で発生した自然災害により被害を受けられた皆さまに心よりお見舞い申し上げますとともに、被災地の一日も早い復旧・復興をお祈り申し上げます。

さて、現在、水道事業においては、高度経済成長期等に急速に整備された管路・施設の老朽化の進行、人口減や節水に伴う水需要の減少傾向、さらに需給ミスマッチ等、多くの課題が山積しております。

今後直面するであろうこの厳しい環境下においては、経営全般を見直し、中長期的な観点から施設の効率的な管理を行う、いわゆるアセットマネジメントの取り組みを加速させることが必要となります。

また、水道は公共性の高いライフラインであり、お客様の料金負担で成り立っていることから、お客さ

まに対し、水道事業の経営改善の取り組みが、市民の皆さまの生活にどのように関わってくるのか、受益と負担の両面でより分かりやすくお示しすることが従来以上に重要になると考えます。

本市では、今年度より次期基本計画の策定に向けた作業が本格化しておりますが、次期基本計画では、アセットマネジメントの強化に加え、他都市の先進的な取り組み等も踏まえながら、お客さまとの双方向コミュニケーションの拡充に力を注いで参りたいと考えております。

現在は、新たな計画の策定に向けて、お客さまアンケートの実施、外部委員会設置のほか、局内の組織横断型検討会を開催するなど、特定の部署だけではなく、職員一丸となって鋭意取り組んでいるところです。

水道事業の50年先を見据え、しっかりとした計画を策定し、安全で良質な水道水の安定供給を次世代に確実に引き継ぐため、今度も事業運営に全力で取り組んでまいりますので、皆様の一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。



街道歩き

川崎市
上下水道事業管理者
金子 督

5年ほど前から昔の街道を歩き始めた。はじめは東海道。某旅行社の企画する日本橋から品川宿までの日帰りパックツアーに参加したのがきっかけである。軽い興味で家内と2人で参加した。良いお天気で新橋～芝増上寺大門～泉岳寺～品川宿と途中で弁当を頂きながら気持ちの良いウォーキングが楽しめた。二度目は私の勤務地でもある地元川崎宿まで、多摩川六郷の渡し場などを辿り、改めて我が街の歴史に触れることができて面白かった。

家内も満更でもなかったようで、箱根越えまでがんばってみようかと言っていたのがいつしか三島、沼津を過ぎ、ツアーは日帰りから一泊二日となっていた。

そうなる家内も私も勤めのある身、毎月のツアーの日程がなかなか合わず、やむを得ず旧街道マップを

購入して、自分達で歩き始めた。

結局2年半かけ、26回41日目に約500kmの東海道五十三次を踏破し、京都三条大橋にゴールしたが、夫婦で共有する達成感はまた格別であった。

その後、赤坂御門から伊勢原・大山までの大山街道、約80kmを5日かけて歩き、山頂の阿夫利神社を参拝した。昨年からは約530kmの中山道を歩き始めてこれで通算10回目になる。

東海道が太平洋の沿岸コースであるのに対して、中山道は山岳コースということもあり、比較的昔の街並みが残されている宿が多く、現在でも宿泊可能な昔の旅籠もある。お江戸日本橋から京都に向かう第一の難所である碓氷峠は標高1,180m、今年の暑くなり始めた頃の峠越えとなり結構きつかったが、今回はいよいよ中山道最大の難所と云われる標高1,600m、宿間22kmの和田峠越えである。あせらず、秋の紅葉を楽しみながら小さな達成感を求めて歩いてこよう。

ずいひつ

Z U I H I T U



事業の根幹「人材力」の強化

名古屋市上下水道局長
宮村 喜明

なごやの水道は大正3年に給水を開始し、平成26年に給水開始100年を迎えました。次の100年に向けて舵を取り始めたところですが、決して順風満帆な船出ではありません。人口減少に加え、さらなる節水機器の普及など、料金収入の先行きが非常に厳しい中、南海トラフ巨大地震に備えた施設の耐震化や老朽施設の更新は待ったなしの状況にあります。

このような状況下において、財源の確保はもちろん重要ですが、事業運営を担う人材の育成、人材力の強化はそれ以上に重要だと言っても決して過言ではないと思っています。

当局においては、これまでも職場でのOJTや実践的な研修の実施により時代に即した人材育成に取り組んできましたが、いわゆる「官から民へ」の流れの中で、

組織の効率化や民間委託化を進めていくうえにおいても、局として保持していかなければならない知識・技術を確実に継承していくことが求められています。

また、中部地方の中核都市として、当該圏域全体の技術力の維持向上、さらにはJICA等を通じた開発途上国への技術協力など、今後も様々な場面で貢献していきたいと考えています。

このような様々な課題を乗り越え、持続的な事業運営を行っていくためにも、人材力の強化を、将来を見据えた最重要事項と位置付け、OJTを行いやすい環境づくりや効果的な研修の体系化などを行いながら、職員が自ら学び成長する意欲をサポートしていきます。

人材育成の成果は一朝一夕に実を結ぶものではありませんが、職員の成長が組織の持続的発展につながり、これが次の100年を担っていくものであると信じ、常にチャレンジ精神を持って様々な取り組みを進めています。



熱かった1年

山口県企業局
公営企業管理者

小松 一彦

今年の山口は、ことのほか熱かった。夏の異常気象のことではない。今年が明治改元から150年の節目を迎えることから、維新胎動の地を自負する山口県では、「やまぐち未来維新」と称して、維新ゆかりの展覧会やセミナーをはじめ様々なイベントが県内各地で開催され、大いに熱く盛り上がった。なかでも中核イベントとして位置づけた「山口ゆめ花博」は、広い会場を山口の1,000万本の花で埋め尽くし、日本一高い木のブランコ遊び、コンサートや体験プログラムなど子どもから大人、お年寄りまで楽しめる盛りだくさんのイベントとライトアップされた夜の幻想的な眺めが評判を呼び、入場者は目標の50万人の倍の100万人を突破した。

これらの取組を通して、幕末の激動期を駆け抜けて

いった志士たちの志や行動力を学び直し、これからの150年につなげていくという「やまぐち未来維新」の趣旨は、これからも必ずや受け継がれていくものだと考えている。

山口県企業局の工業用水事業は、現在、14事業、給水能力日量171万tの全国一の規模となっているが、給水需要の伸び悩み、施設の老朽化・耐震化対策、ベテラン職員の退職に伴う技術の伝承などの多くの課題を抱えている。これらの課題を乗り越え、地域へ貢献していくという責務を果たしていくためには、職員一人ひとりの力を高め、それを組織としてまとめ、力強い突破力に結集しないといけないと考えている。特に、幕末期の志士たちのように若い人たちの、従来のやり方には捉われない柔軟な発想と失敗を恐れない思い切った行動力が是非とも必要である。

「若さに期待し、若さに託す」のが防長教育の伝統である。若い人が思いきり仕事ができる環境整備を今、私たちががしなないといけない。